

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇一九年（平成三十一年／令和元年）十二月二十日
第二號（通卷第三十六号）



八大山人「安晚帖」山水圖（泉屋博古館蔵）

◆目録

巻頭言

二 大会中止と社会科学院との交流について

金 文京

四 「谷（やと）」の風景

赤井 益久

六 ポストンで得たもの

松村 茂樹

八 京大―東大中国語学中国文学研究交流会

三村 一貴

一〇 日本中国学会二〇一八年度（平成30年度）収支決算書／二〇一九年度（平成31年・令和元年）予算書

十二 二〇一九年度 会員動向／新入会員一覧

十三 各種委員会報告

大会委員会／出版委員会／選挙管理委員会／広報委員会／将来計画特別委員会

十四 事務局からのお知らせ

「国内学会消息」についてのお知らせ

十六 「日本中國學會報」論文執筆要領

編集●出版委員会 静永 健

〒819-0395 福岡市西区元岡7-4-4 九州大学文学部

メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

大会中止と 社会科学 学院との 交流について

理事長
金 文京

大会中止にかかる措置について

十月十二、十三日に関西大学で開かれる予定であった第七十一回大会は、台風のため中止となりました。大会中止は本学会の歴史上初めてのことです。大会前日の学会ホームページでのお知らせが、開催から急遽中止へと変更となり、多くの会員、とりわけ遠方から前日に大阪に来られた方々に多大のご迷惑をおかけしたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。その後の措置については、ホームページ上ですでお知らせいたしましたが、ご覧になっていない方もおられると思いますので、以下ご説明いたします。

まず大会プログラムのうち、十二日午後に予定されていた特別講演会は、翌十三日午前に関西大学主催により、鄭傑文氏（山東大学国際漢学研究センター教授）「全球漢籍合璧工程」、安岡孝一氏（京都大学人文科学研究所教授）「AIを用いた漢文の文法解析」の二つの講演が行われました。これは本学会主催ではありませんでしたが、今回のプログラムのうち実施された唯一の行事です。

次に今大会での発表予定者に対して、希望者には発表予定であった旨の証明書を学会から発行する、「大会要項」記載の「発表要旨」よりは詳しい内容をホームページに掲載できる、来年度大会で同一テーマの発表を希望する場合は優先的に取り扱う、以上三点をお知らせし、また司会予定者の方々にも、それぞれの発表予定者への助言をお願いしました。また学会賞の受賞予定者には、賞金は郵送し、授賞式については来年度大会で改めて行う旨、連絡いたしました。

ついで事前に振り込まれた大会経費について、懇親会費、弁当代などは直前の中止のためキャンセルできず、当初、返還は難しいと考えていましたが、その後、会員の方々からのご意見もあり、理事会で協議した結果、全額を返還することとし、評議員会の承認を得て、相当金額の為替証書を簡易書留で各自に郵送いたしました。これに要した費用について、今この文章を書いている段階ではまだ確定していませんが、概略を申し上げますと、事前申請者252名、振込総額112万9千円、学会から開催校への大会補助費100万ですが、前日まですでに大半が支出済で、かつ懇親会費などがキャンセルできなかったため、残余金は約48万円でした。返還にかかる費用は、為替購入費、郵送費、作業アルバイト代を含めて約132万円で、不足額約84万円は学会予備費から支出いたしました。詳細については、来年度大会の総会場でご報告いたします。予備費をこのような目的に使用することについては、色々ご意見もあると思いますが、今回のような非常事態に際し、事前に振り込んでいただいた会員の損失をできるだけ補填することが学会の責務と考え、このような決定をいたしました。ご理解をお願いいたします。ちなみに学会の予備費は、今年度は1840万円ございます。

来年度の大会は、十月十（土）、十一日（日）、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて開催される予定です。すでに日程変更は難しい状況で、万一また台風が来た場合を想定して、理事会、大会委員会、開催校共同で、今回の教訓をふまえ、できるだけ混乱を回避できるよう対策を講じる所存です。

今回の事態について、反省すべき点、今後のために考えるべき点は多々ありますが、ここで一つだけ申し上げると、緊急の場合、会員全員にすみやかに連絡する方法がホームページ以外にないことが挙げられます。ホームページに掲載するという事は、学会内部の出来事を、いわば全世界に公表しているに等しいわけで、内容によっては好ましくない場合もあると思います。現在、学会事務局では会員全員のメールアドレスを把握しておりませんが、今後はこれについても考えねばならないでしょう。現段階ではとりあえず、時々学会ホームページをのぞいていただくようお願い申し上げます。お気づきの方も多いと思いますが、ホームページはリニューアルされています。

中国社会科学院との交流について

以上、気が重くなる話題でしたが、ここで一つ朗報をお知らせいたします。『日本中国学会報』の「学界展望」が近年、従来の著書・論文リストから紹介の文章が変わったことをご存知と思いますが、このほど第七十集（二〇一八年）の「学界展望」が中国語訳され、中国社会科学院文学研究所が編集する『古代文学前沿与評論』（社会科学文献出版社）第三輯（二〇一九年十二月刊行）に掲載されることになりました。雑誌のタイトルは「古代文学」となっていますが、古代から現代まで、また哲学や語学も含むということで、「学界展望」の哲学・文学・語学すべてが翻訳され、雑誌だけでなく、同研究所の「微信（WeChat）」にも掲載される予定です（私自身はスマホを使わないのでわかりませんが、スマートフォンアプリ <http://wechat.com> をダウンロードして、「古代文学前沿与評論」を検索しフォローすれば、閲覧可能とのこと。関心のある方はどうぞお試しください）。

これは昨年の初め、同研究所から本学会に対し提案があったもので、その後、理事会で協議し、出版委員会を通じて「学界展望」各執筆者の同意を得たうえで進め、評議員会にも事後になりましたが報告いたしました。近年、中国での学会などに参加される方も多くと思いますが、「学界展望」が中国で紹介され、多くの研究者の目

にふれることは、日本の研究状況への理解を深め、ひいては今後の日中交流活動を活発にするうえで大きな意味があると思います。特に「微信」は、近年若手研究者を中心に、中国では大きな影響力をもっているようで、これにより日本の研究状況が広範囲に伝わることになり、反響が期待されます。

ただし今回は初めての試みでもあり、中国側が翻訳した原稿のチェックのため、「学界展望」の各執筆者の方々に多大な負担をかけてしまいました。今後この事業を継続的、安定的に進めるため、本学会の方でも翻訳チームを作り、日中共同で翻訳ができるようにすることが望ましいと思います。

このために現在出版委員会で翻訳チームの構成や運用についての規則を作成してもらっています。またこの翻訳チームのため、今後学会の予備費から必要な経費を支出することになるとは思いますが、予備費は本来、歴代の理事長が今後予想される学会の国際化のために、節儉に努められ準備されたものですので、このような用途への使用は相応しいものと考えます。これについても、理事会での協議、評議員会の承認を経て、来年度大会での総会でご説明したいと思います。

中国社会科学院からは、このほかにも本学会と文学研究所双方のホームページの連結、文学研究所が毎年刊行する『中国文学年鑑』の情報の本学会への提供などの提案をいただいております。文学研究所との交流は、本学会の今後の国際化、また日中学术交流を進めるうえで好ましいことですが、ただし現下の国際情勢に鑑みると、特に近現代の分野では、場合によっては双方の見解が、あるいは食い違うような事態も予想されますので、それぞれの案件について理事会で討議し、慎重に進めていく所存です。

最後に、今回の大会中止について、会員のみなさまのご理解とご協力に改めて感謝申し上げるとともに、来年度の大会がどうか好天に恵まれ、無事開催できますよう、人定勝天をみなさまとともに切望する次第です。

「谷（やと）」の風景

赤井 益久
國學院大學

自宅の近くに小高い尾根を列ねる丘陵を中心に、周囲十数キロほどの自然公園が広がる。四季折々の景観が人を惹きつけ、時おり散歩に出かける。懐深い奥山を抜け、山を下り山裾に沿って歩くと、そこに小川が流れ、種々の動物やその土地独自の植生を見ることができ、村里との間に独特の空間が現出する。一般的には「里山」と言うのであろうが、地元の人々はそこを「谷（やと）」もしくは「やつ」と呼ぶ。のどかで、落ち着いた雰囲気をもつ土地柄だ。横浜の街中で生まれ育った身にとっても、なぜかそこはかたない懐かしさを感じさせ、苛立ちや焦る心を優しく包み込み、慰めてくれる素敵な空間である。

散策は思いがけず思考を円滑にしてくれる効果があるが、いつしか来し方行く末に思いを致すことが多くなった。

*

学問に志してより、とくにそのことに対しては大した疑問も感じたことはなかった。目の前にある体系だったものを学ぶことが目的であった。まっすぐに進んでくれば良

かった。職業としての大学教員となっても特段変化を来すことはないように思えた。仕事に追われ、その余裕もなかった。だが、中年を過ぎてから、「学ぶ」こと「研究する」ことを生業とする学者は職業なのか、あるいは一個人の使命なのかという問いかけが頭の中をよぎるようになった。若い頃はその間に隔たりや矛盾を感じたことはなかった。とりわけ大学教員として定年を控え、職業から退くことが研究を止めることになるのか。あるいは使命として一生存続するのか。学者あるいは研究者とは、「生き方」を示すものであるのか。その問い掛けは、歳をとるにつけ抜き差しならぬ思いが強くなった。それほど神経質に両者を峻別する必要があるのかという思いも一方ではあり、きっぱりと手を切るのも生き方の一つであるとも思う。

若い頃に接した中国学、とりわけ古典学は文献を中心にかなり牢固とした体系を持ち、「漢学」の伝統を汲むディシプリン（discipline）が示されていたように思う。その後、現代中国との関係が深まり、研究面でも教育面でもいわゆる現代化・国際化が意識されるようになり、グローバル化が進展する。その度合いが深まるに従って、改めて世界の中の中国学と、日本における中国学という枠組みとして「学」の確立が迫られてきたように思う。前者にあっては日本人としての世界における優位性はない。後者にあって、とりわけわが国の独自性が求められるように思う。その独自性が世界的に見て孤立した「独り善がり」であっては存立しない。

内藤湖南博士が標榜した所謂「唐宋変革論」、すなわち古代・中世・近世の何れの時代に大きな変革があったかを問う研究は、今改めてその主張が脚光を浴び、さまざまな回顧や検証が行われている。文学における大きな変革が唐代中期にあると指摘する中世と近世の境を前倒しする日本発祥の考え方は、日本における分厚い白居易研究の土壌の上に花開いた。この文学や歴史、思想にわたる中唐研究の成果は、今では広く中国を始めとして普遍的な考えとして受け入れられている。世界の中における中国学として、わが国が上げた成果の一つであると言って良いだろう。

一方、わが国独自の進展とは何を言うか。それは豊穡な

中国文化をわが国に紹介し、普及する役割とそれへの貢献である。以前は、中国学の「準備性」(readiness)を担う役割として中等教育における「古典」(古文・漢文)教育が大きな比重を占めていた。しかし、指導要領の改訂のたびに時間数を削減され、英語や数学に取って代わられた。理系の教育の偏重は、いきおい文系教育の軽視となって現れ、伝統であった国語教育における文学離れが進んでいる。現今の文系軽視の風潮につながる。日本人の言語活動の中核を担う教育が、今は昔に比べ減少しているのである。中学や高校の生徒を惹きつける個性ある面白い教科書作りも、時間と労力が求められる地道な作業だ。その作法や流儀も、古来の「訓読」に頼っている。その訓読自体も特別な訓練を必要とする状況が現出している。すなわち中国学側から見て、中等教育の準備性を問えなくなる時期が早晚訪れるであろう。より深い中国古典や中国文学に大学で初めて接するような状況がそう遠くない時期に将来される。その時には、その世界に魅了し、引き込む翻訳や注釈が求められる。

訓読に頼ったがために、古典に新しい息吹を吹き込む努力を疎かにしてきたかに見える経緯にも目を背けてはならない。訓読して分かった気になり、言葉の真の意味や理解に分け入る努力はこれまでも、これから引き続き継続されなければならない。

と言って、以上述べた課題を克服する何か妙案があるわけでもない。古典読解の基礎力を養う簡潔で普遍性を持つ教育課程を提供する必要があるだろう。わが師である澤田瑞穂は「古今兼学、語文双習」を唱え、自らも実践し、門下生にも課していた。従来漢学の伝統、新たな中国学の先進性かつ複合領域化をいかに切り結んでいくかが問われているように思われる。斯学の次代の担い手は、そうした努力の果てに現れてくると思われてならない。

* *

現在の大学教員に求められる資質には4つの条件があると言われる。つまり教育・研究・校務・社会貢献である。教育と研究は言うまでもないようだが、さらにそれぞれには質的保証が問われる。質保証は大きく3つに分けて考えるのが理解しやすい。外部質保証、中間質保証、内

部質保証である。一般的に言って、質保証という場合内部質保証を指すことが多い。内部質保証とは、授業における計画と実践、何を学んだかではなく、何を身につけたかを可視化して示し、学習者が自覚できること。それを組織的に保証することだ。ところが、それは当然のことで、むしろ法律・省令・細則などの規則を指し、研究教育を社会的に規正する外部質保証、また学協会の専門家が独自にその分野に必要な自律的かつ自主的に定める倫理規範・研究規範・基準・指標などの中間質保証が相俟って、質保証は整合性を持ち、機能する。分野ごとの学会の役割と責任はけっして軽くはない。

この世に生を享け「学成り難し」の思いを痛感すると共に、一方で「事を為す」必要性も感じている。中高生とそれを指導する先生方に役に立つ教科書とを思い、二十年来にわたって教科書の編集に携わり、本務として勤める大学に中国文学科を創設するために心血を注いだ。校務も一通りのことはしてきた。学会に対する貢献も多くの同志と共にしてきたつもりである。

そうした中で、「学」の一方の要素であるわが国独自の中国学といった視点でも留意すべきことがある。明治以降、それまで各地で伝えられていた文化財が急速に失われ、あるいは回復不可能な事態に陥っていることだ。言うまでもなくわが国の学問の進展は、漢学の伝承とそれを批判原理として、永い間にわたる受容・相克・融和の中で析出されてきたものである。日本人のアイデンティティ(identity)形成に不可欠な要素を顧みない傾向は、グローバル化の対極にある。結局グローバル化とはローカルの集合体であり、独自文化を軽視することは文化交流を否定することに結果的に結びつく。今後は多少でもそれに貢献することが自分の使命であると思っている。

学問には、力強いダイナミズム(dynamism)がある。また、学問にはそれぞれの持つ風貌がある。中国学には、まだまだ魅力の尽きない風貌がある。

それは奥行きが深く、穏やかなたたずまいを見せ、人の心を慰め、人を惹きつけて放さない「谷(やと)」の風景に似ている。

ボストンで得たもの



ボストン美術館にて

松村 茂樹

大妻女子大学

筆者は、2015年4月から2016年3月まで、勤務先の海外研修制度により、ボストン大学客員研究員として、米国ボストンに1年間滞在し、ボストン美術館でも調査研究をさせていただいた。帰国後4年になろうとする現在、この1年間の経験は、筆者の研究と教育、そして人生に大きな示唆を与えてくれたとしみじみ思う。ここに、印象に残るいくつかの事柄を記しておきたい。

自己責任による仕事

ボストンに着いた後、しばらくは生活準備の手續きに追われた。ネット契約も必要だ。電話で申し込めるほどの英語力がないので、ネット接続業者に出向くことにした。カウンターには3人の従業員が並んでおり、真ん中の若い女性が手招きするので、そこへ行き、ネット契約をお願いしたいと言うと、プラン一覧表を出してくれた。最も安い30ドル代の契約を選んだところ、2年契約だがいいかと言う、1年だと言うと、1年契約ならこちらになると、130ドル代のプランを勧められた。私は、ダメ元で、2年いたい、規定により1年で帰らねばならない。なんとかこの安いプランにしてくれないかと言うと、しばらくプラン表を見てから、「いいよ!」と言う。驚く私に、1年でやめたら

ダメだとは書いていないからと言う。両隣の先輩従業員らしき人たちもこのやりとりを聞いていたが、何も言わない。かくして、私は安いプランでネット契約ができたのである。

これは日本だったらまず無理だろう。少なくとも上司に聞いてみるなどと言われるはずだ。この時私は、米国人は自己責任で仕事をしているのだと実感した。その後、このような方に少なからず出会ったが、どなたも皆、生き生きと仕事をしているのが印象的だった。自分の責任でやる仕事にはやりがいがあるのだろう。

中国語での研究生活

筆者をボストン大学に受け入れてくださったのは、ボストン大学美術史・建築史学部の白謙慎教授である。白教授は、指導されている大学院生の陳霄さんをチューターに付けてくださり、陳さんのおかげで、様々な手續きを滞りなく進めることができた。白教授や陳さんとは中国語で話せるのがありがたかった。ほどなく、白教授は、ボストン大学アジア研究センターの懇親会にお誘いくださった。同センターは、ボストン大学のアジア研究を行う教員が学部横断的に参画している研究所である。懇親会には世界各国からの客員研究員も多く参加していたが、驚いたことに、ここでは皆、中国語で会話をしていた。当時所長であった Eugenio Menegon 教授は、イタリアの方とのことであつたが、極めて流暢な中国語で私に話しかけられた。私を中国人だと思われたらいい。それも仕方ないことで、この日、ここに集っていた人の多くが中国人または中国系の方で、日本人は私だけだった。

そして、白教授は、ボストン美術館中国美術部長の Nancy Berliner 博士をご紹介くださった。彼女に会ったところ、なんと33年前、中国北京の中央美術学院美術史系留学時のクラスメートではないか! 口を衝いて出るのは、当時のように、中国語である。Berliner 博士は、ボストン美術館での資料調査の便宜を図ってくださり、ハーバード大学大学院博士課程に在学しつつ同美術館でパートタイム学芸員をしていた劉子亮氏をチューターに付けてくださった。かくして、米国にいながら、私の研究生活はほとんど中国語で事足りたのである。

ボストン美術館での成果

ボストン美術館では、1904年から1913年まで顧問および中国・日本美術部長を務めた岡倉天心(1863-1913)、および天

心が鑑査委員を委嘱した当時上海在住の長尾雨山（1864-1942）の資料調査を行うことができた。ボストン美術館には、「中国最後の文人」と称される呉昌碩（1844-1927）の「与古為徒」扁額が常設展示されている。従来、この扁額は天心が呉昌碩に依頼したと言われて来たが、筆者は、1912年、雨山が鑑査委員を委嘱された際、その記念として、隣人として極めて親しく交わっていた呉昌碩にこの扁額を書いてもらい、同美術館に贈ったと考えた。

この論証のため、雨山に関する資料を見せて欲しいとお願ひしたが、今は残っていないと言う。だが、アーカイブを管理されている Angie Simonds 氏に再度お願いしたところ、前出の劉氏と共に、何度も資料庫に入り、遂に雨山関係の未発表資料を見つけてくださった。しかも、雨山が同美術館で重要な役割を果たしていたことを証明できる資料であり、今回の研修の極めて大きな収穫となった。その他、天心が自ら題簽を書き、蔵書印を捺している一連の漢籍を発見するなど、大きな成果をあげることができたのである。

ボストン大学での授業

ボストン大学では、白教授の研究指導を受けていたが、夏休みに、9月から浙江大学に転任することになったと告げられた。指導している大学院生もいるので、しばらくはボストンに留まり、研究指導も続けるので心配なきようとのことであった。ただ、ボストン大学では授業はされないの、9月からは他の教授の授業に出てみることにした。ちょうど、東京大学の藤井省三教授にご紹介いただいた Catherine Yeh 教授が、長期休暇からお戻りになり、授業を再開されたため、中国のパフォーマンスアートおよび映画を多角的に取り上げた週2回の授業を聴講させていただいた。10～15名程度の少人数で、学生に常に問いかけ、発表させ、考えさせる方法が採られており、このような学生の主体的能力を伸ばすことを目的とする授業は、学ぶべき点が多かった。私も米国人学生とペアを組んで、映画『黄色い大地』についてプレゼンをさせていただいた。

その他、ボストン大学では、ゲストスピーカーとして授業をさせていただいた。J. Keith Vincent 教授の日本文学の授業では、Vincent 教授の要請で『源氏物語』について話し、なぜ『源氏物語』は古典なのか、古典とは何か、なぜ古典を学ぶのかといった本質論に言及した。また、Etsuko Okita Snyder 講

師の漢字と書法についての授業では、「書」について古代の漢字の字形から説き起こし、実技により書法を体験してもらった。なお、実技指導は書法教師の妻が担当した。共に学生の反応は良く、質問が多く出された。

納得が得られれば実現する

筆者は、ボストン大学の客員研究員であったが、お隣のハーバード大学の研究所や図書館にもよく寄せていただいた。チューターの陳さんが、ハーバード大学中央図書館に連れて行ってくれ、そこで日本の勤務大学の教員証を提示すると、訪問研究員 ID を発行してくれた。この ID があれば、日本、中国関係の文献資料が豊富に収蔵されているハーバード燕京研究所の図書館をはじめ、ハーバード大学の図書館を自由に利用できる。さらに、ハーバードの Weatherhead Center（国際問題研究センター）、Fairbank Center（中国研究センター）などのシンポジウムにも自由に参加できた。

また、筆者は、MIT（マサチューセッツ工科大学）を会場に開催されるボストン日本人研究者交流会では、「書法から日中の文化を考える」と題した日本語による講演を、ボストン大学の東アジア考古学および文化史国際センターでは、“The Last Chinese Man of Letters: Master Painter/Calligrapher Wu Changshuo 呉昌碩 and his style of ancient Shiguwen 石鼓文 “Stone Drum Script”」、アジア研究センターでは、“About Wu Changshuo 呉昌碩’s “Yu-Gu-Wei-Tu 与古為徒” Chinese Plaque in the MFA, Boston and the contribution of Nagao Uzan 長尾雨山。”と題する英語による講演をさせていただいた。これらは、筆者がお願いしてさせていただいたもので、ボストンでは、講演をしたいとお願いすると、何を話すのか？どんな意義があるのか？と聞かれ、納得いただける回答ができれば講演が実現するのである。また、帰国間際には、ハーバード大学名誉教授 Ezra Feivel Vogel 氏の自宅で行われている「ボーゲル塾」への出席が叫び、Vogel 氏の真横に座らせていただき、「移民問題」のディスカッションに参加できた。

自己責任の国である米国の学術都市・ボストンは、筆者にとって、不可能が可能となる夢のようなところであった。そのようなところに行け、このような経験ができたのも、研修に出してくれた勤務大学および多くの方々のご支援のおかげである。感謝の意を表明して結びとしたい。

京大—東大中国語学 中国文学研究交流会

三村 一貴
東京大学大学院生

2017年夏より始まった京大—東大中国語学中国文学研究交流会は今年で三回目を迎えた。研究発表を通じて学生相互の交流を図るべく、先生方の発案により実現したものである。これまでの交流会の概要を記せば下の如くである。

【2017年・第一回】会場：京都大学

- 8月2日 研究発表会
発表者：京大3名、東大2名
13時30分開始 終了後、懇親会
- 8月3日 人文科学研究所・京大文学研究科図書館書庫見学

【2018年・第二回】会場：東京大学

- 7月31日 研究発表会
発表者：東大3名、京大3名
午前の部：10時30分～12時30分
午後の部：13時30分～17時20分
終了後、懇親会

- 8月1日 東大総合図書館書庫・漢籍コーナー・東洋文化研究所書庫見学

【2019年・第三回】会場：京都大学

- 7月29日 研究発表会
発表者：京大3名、東大3名 参加学生合計19名
午前の部：11時～12時30分
午後の部：14時～17時15分
終了後、懇親会
- 7月30日 京大文学研究科図書館書庫見学

各回とも学生が司会を務め、発表者の持ち時間は45分である（発表30分に討議15分を目安とする）。

交流会が満足したのは恰もわたくしが修士課程に進学した年であり、以来年に一度の楽しみ、大学院生活の一つの励みとなっている。第一回では幸いに卒業論文の内容をもとに発表する機会を得たが、普段意見を伺うことができない先生方や学生諸氏のさまざまな見方に接し、殊に思い出深いものとなった。

中国語学中国文学研究交流会と銘打っているのは、両大学の中文研究室が主体となっているためであって、他学科からの参加を妨げるものでないのみか、むしろこれを歓迎している。これまでには中国思想や東洋史部門から参加があったが、今後もさまざまな分野から知識が集結し、さらに豊かな場となってゆくことを願っている。個人的にも、この会での交流から派生して、中国研究以外の分野の人と繋がりを持つことができ、年々波及的効果が見えている。

その性格が学会ほど公的でなく、仲間内の研究会ほど私的ではないため、どのような会にするかは参加者の工夫次第ともいえる。本年は新たな試みとしてコメンテーターを設けたが（これも学生が務める）、活用の仕方にはいろいろな可能性が考えられる。コメンテーターが当該の発表内容に関連する知識を持っていたならば、専門的な議論をするのも良いであろう。ただし討議の時間が発表者とコメンテーターとの問答に終始した場合、余程の

議論であれば聴衆も身を乗り出してこれを聴くであろうが、そうでなければいささか興味索然たる気味がある。例えば、聴衆は当該分野に通じているとは限らないのであるから、発表者とともに背景の説明をするなども一つの方法であろう。また聴衆もごく初歩的な疑問だからといって質問を控える必要はない。調べれば分かるようなことでも質問を出せば、それは発表者にとって有益であろう。基本的な事柄であっても相手が理解できるよう説明する訓練となるからである（個人的な経験であるが、かつて演習の発表において、語の「意味」と「機能」とはどう違うのかと問われて説明に苦しんだことがある）。以上はこれまで参加してきた上での反省を含めての考えであるが、要するに万事柔軟に行われているということである。

* * *

一義的には研究発表の場であるものの、ここで可能となるのは研究上の交流のみではない。各人の知識は当該の学問分野に限られるわけではなく、知的背景の中にその学問分野があるのであり、その余剰部分から触発される所は極めて大きい。この会の意義を今ははっきりと述べることは難しいが、得体の知れぬ火花が生じつつある実感だけははっきりとしている。先生方が本会を設けられたのは、定めて現今学問が取り巻かれている状況を鑑みた結果であろう。その趣意の何たるかについては、なお大学院生の身として見える所が限られているため、憶測を以て記すことは控えたい。ただ大学院生の身として得られるその実感をいささか申し述べることを許されたい。

現代文明の進展に伴い、人間の連帯と孤立とがふたつながら顕在化しているが、いずれも過剰であるか非本質的であることが多いように思われる。事を大学に限っても、大学院で文系の学問を行ってゆく苦しみを語る声が時に聞こえてくる。それがどの程度正確な語り方をしていのかわたくしは判断できない。またそのような声の背後にある社会学的要因についてもわたくしは分析する能力を持たない。我が身に至っては、単に幸運を享受し

ているに過ぎないかもしれない。これらのことを自覚しつつ敢えて言えば、我々が時に陥る孤立は、全く過剰なものではなからうか。そして人を孤立せしめる、見える制度、見えざる制度もまた、過剰である。その過剰さに追い詰められることがあるのもまた事実であるが、そこから脱却しようとするならば、まずは動くしかない。

研究は（強弱の差はあれ）個々人の意志があって行われるものであるが、自意識の中に躊躇することに意味があるとわたくしは思わない。必要を感じた時は他者と接すればよい。研究室もまたそこに閉じこもるためにあるのではない。しかし研究室という単位の中には独特の意味がある。知の密度が高まってゆく空間としての意味である。そのような空間どうしがぶつかり合ったとき、ここに火花が生ずる。かくして知は涸渇を免れるのである。それでは個人または集団が動こうとする時、何をたよりにすれば良いのであろうか。それは「共通言語」であると言いたい。ありふれた言い方をすれば「話の通ずる人」と連帯するということである（個々人の研鑽という点では「人に通ずる話ができるようになる」ということになる）。我々は日本で中国語中国文学を研究する者として、漢語や日本語といった実際の言語はもとより、歴史、文化や物の考え方などを（それらは無論完全に同一なものではないが、ともかく）「共通言語」として語り合うことができる。さればこそその場限りの関係性ではなく、継続的なやりとりを構築することができるのである。

先ほど述べたように、この会は学会ほど公的ではなく仲間内の集まりほど私的ではないが、研究室というある程度公的な性格を帯びた単位で動いていることにわたくしは意味を感じず。研究室が独自に動くことで成り立っている本交流会が続いてゆけば、やがて火花が火花へとつながることもあるのではなからうか。それがいつどこで見られるかはまだ分からないけれども。



日本中国学会 2018年度 (平成30年度) 収支決算書

2018年4月1日～2019年3月31日

(単位：円)

科目	予算	決算	摘要	差額
収入の部				
1. 前年度繰越	¥18,874,999	¥18,874,999		¥0
2. 会員会費	¥10,000,000	¥9,400,000		¥-600,000
3. 寄付金	¥800,000	¥785,000		¥-15,000
4. 預金利息	¥1,500	¥129		¥-1,371
5. 著作権料分配金	¥0	¥1,910		¥1,910
総計	¥29,676,499	¥29,062,038	(A)収入総計	¥-614,461

科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部				
1. 事務局総務費	¥2,460,000	¥1,575,085	(1)～(7)	¥884,915
(1)印刷費	¥850,000	¥545,565	「便り」・封筒印刷費を含む	¥304,435
(2)通信費	¥850,000	¥611,652	「便り」発送費を含む	¥238,348
(3)交通費	¥100,000	¥5,480	事務局補佐員交通費等	¥94,520
(4)消耗品費	¥50,000	¥31,949		¥18,051
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥350,000	¥170,439	うち振込手数料¥109,420	¥179,561
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,489,000	(1)(2)	¥71,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,129,000	事務局補佐員謝金を含む	¥71,000
3. 事務局会議費	¥720,000	¥559,791	(1)(2)	¥160,209
(1)会議費	¥120,000	¥96,607		¥23,393
(2)役員旅費	¥600,000	¥463,184	前年度計上・経理手帳印刷費	¥136,816
4. 事業費	¥5,500,000	¥5,298,404	(1)～(3)	¥201,596
(1)学会報等刊行費	¥3,900,000	¥3,678,933	イ～ニ	¥221,067
イ. 印刷費	¥2,000,000	¥1,959,660	学会報及び名簿	¥40,340
ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥252,000	英文要旨作成	¥48,000
ニ. 発送費	¥400,000	¥267,273	佛サンセイ業務委託等	¥132,727
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,019,471		¥-19,471
(3)70年記念事業費	¥600,000	¥600,000	イ～ロ	¥0
イ. 70年大会補助費	¥500,000	¥500,000		¥0
ロ. HPアップデータ整理	¥100,000	¥100,000		¥0

科目	予算	決算	摘要	差額
5. 各種委員会運営費	¥1,330,000	¥869,488	(1)～(7)	¥460,512
(1)大会委員会	¥65,000	¥27,030		¥37,970
イ. 通信費	¥5,000	¥2,780		¥2,220
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥19,250		¥30,750
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥780,000	¥550,223		¥229,777
イ. 通信費	¥100,000	¥107,588		¥-7,588
ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥360,119		¥239,881
ハ. 謝金	¥60,000	¥76,432		¥-16,432
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥6,084		¥13,916
(3)出版委員会	¥225,000	¥157,112		¥67,888
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥139,522		¥60,478
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥2,590		¥2,410
(4)選挙管理委員会	¥120,000	¥89,123	改選年	¥30,877
イ. 通信費	¥15,000	¥9,922		¥5,078
ロ. 会議・旅費	¥60,000	¥49,985		¥10,015
ハ. 謝金	¥40,000	¥29,000		¥11,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥216		¥4,784
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(6)広報委員会	¥100,000	¥36,000		¥64,000
イ. 通信費	¥15,000	¥4,000		¥11,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥12,000		¥-7,000
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥0		¥50,000
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥20,000		¥5,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
1～5	¥11,570,000	¥9,791,768		¥1,778,232
予備費	¥18,106,499	¥0	支出費目としては計上しない	¥18,106,499
合計	¥29,676,499	¥9,791,768	(B)支出合計	¥9,791,768
次年度繰越金	-	¥19,270,270	(A)収入総計 - (B)支出合計	¥10,406,232
総計	¥29,676,499	¥29,062,038		¥614,461

学会基金

	基本金	
前年度繰越金		¥4,300,000
特別会計積立金拠出		¥717,199
預金利息		¥0
信託収益金		¥303
合計		¥5,027,502
支出の部		
日本中国学会費		¥160,000
次年度繰越金		¥557,502
合計		¥717,502

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2019年4月25日
日本中国学会監事

牧南悦子 審
岡崎由美 監
永富青地 監

日本中国学会 2019年度 (平成31年・令和元年度) 予算書

2019年4月1日～2020年3月31日

(単位：円)

科目	予算	摘要
1. 前年度繰越	¥19,270,270	
2. 会員会費	¥9,000,000	
3. 寄付金	¥800,000	
4. 預金利息	¥200	
5. 著作権料分配金	¥0	
合計	¥29,070,470	

科目	予算	摘要
1. 事務局総務費	¥2,660,000	(1)～(7)
(1)印刷費	¥650,000	「便り」・封筒等を含む
(2)通信費	¥650,000	「便り」発送費を含む
(3)交通費	¥100,000	
(4)消耗品費	¥50,000	
(5)庶務処理費	¥50,000	
(6)雑費	¥950,000	振込手数料および対外費を含む
(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
2. 事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
(1)幹事手当	¥360,000	
(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
3. 事務局会議費	¥420,000	(1)(2)
(1)会議費	¥120,000	
(2)役員旅費	¥300,000	第1回理事会ほか
4. 事業費	¥4,800,000	(1)(2)
(1)学会報等刊行費	¥3,800,000	イ～ニ
イ. 印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
ロ. 編集費	¥1,200,000	
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
ニ. 発送費	¥300,000	㈱サンセイ業務委託等
(2)学術大会運営補助費	¥1,000,000	

学会基金

基本金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥557,502
預金利息	¥500
信託収益金	¥0
合計	¥558,002
日本中国学会賞	¥240,000
次年度繰越金	¥318,002
合計	¥558,002

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

科目	予算	摘要
5. 各種委員会運営費	¥1,230,000	(1)～(7)
(1)大会委員会	¥65,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥50,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(2)論文審査委員会	¥780,000	
イ. 通信費	¥100,000	
ロ. 会議・旅費	¥600,000	
ハ. 謝金	¥60,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
(3)出版委員会	¥225,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥200,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(4)選挙管理委員会	¥20,000	非改選年
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(6)広報委員会	¥100,000	
イ. 通信費	¥15,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
1～5 予備費	¥10,670,000 ¥18,400,470	
合計	¥29,070,470	

2019年度 会員動向／新入会員一覧

●会員動向（2019年10月4日現在）

総会員数1598名、準会員数47機関、賛助会員数15社

●退会会員

○退会申出会員（今年度第1回理事会承認分） 14名

白水 紀子	千葉 謙悟	平光慎思郎
岩田 礼	齋藤 正和	串田 久治
趙 婧雯	石田 博彦	吉田 公子
汪 涵	李 宝霖	阿依努爾 巴拉提
劉 轟	黄 偉豪	

○退会申出会員（今年度第2回理事会承認分） 7名、1機関

氷上 正	近藤 邦康	吉田 雅子
西堀 智子	阿部 範之	澤井 律之
上 なつき		

関西外国語大学 御殿山キャンパスグローバルタウン
図書館学術情報センター

○4年間の会費滞納による退会会員 39名

●住所不明会員 30名

程 遠	宮内 四郎	大井 浩之
大坊 真伸	竹内 光子	佐々木真理子
横山 健一	松本 奈々	大兼 健寛
許 司未	佐藤 良	木村 剛大
権 慧	関 泉子	関野 祥子
矢淵 孝良	中村 綾	池田 智幸
木村 直子	森 宏之	陳 文輝
熊野 弘子	西川 幸宏	楊 韜
山本 浩史	陳 維	金 東鎮
藤村 浩一	松岡 純子	何 俊

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

●新入会員一覧

10月11日に開催された2019年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

●通常会員 11名

尹 青青	中央大（院）
福島 俊子	お茶の水女子大（院）
呉 穎濤	大阪大（院）
ファンダム トム	大阪大（院）
李 杰玲	国際日本文化研究センター
六車 楓	大阪大（院）
宋 新亜	大阪大（院）
菊池孝太郎	大阪大（院）
辜 知愚	奈良女子大（院）
任 占鵬	広島大（非）
田山 泰三	英明高

なお、以下の方々については5月8日、6月10日付で開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

●通常会員 25名

伊藤 涼	表野 和江	龐 淼
大西 翔	鳥羽加寿也	石川 就彦
王 柳	周 舒静	田中 雄大
張 瀛子	橋本 秀美	葉 純芳
劉 心奕	王孫 涵之	小川 主税
許 曉璐	詹 斐雯	臧 魯寧
陳 駿千	董 伊莎	黎 小雨
猪井 敏也	汪 洋	木村 淳美
鶴田 茜		

訃報

『学会便り』2019年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（敬称略）

二宮 俊博（中部地区）	2019年4月12日
近藤 光男（関東地区）	2019年7月11日
大高 順雄（近畿地区）	2019年7月26日

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長 赤井 益久

(1) 2019年第71回大会（関西大学）について

2019年10月12日（土）～13日（日）の二日間、関西大学（大会準備会代表：吾妻重二会員）で開催される予定でありました第71回大会は、観測史上例を見ない超大型台風19号の襲来のため急遽中止のやむなきに到りました。1年以上を掛けて万般にわたり周到な準備をされました関西大学関係者の皆様に対して深甚の謝意を申し上げます。また、中止の発表が直前になり、会員諸氏におかれましては混乱を来し、ご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。理事会では、記録上「2019年第71回大会（関西大学）」とし、ただし「台風により中止」の注記を付し残すことにしました。したがって、今回は第72回大会としてご案内し周知することに致します。

(2) 2020年第72回大会について

2020年第72回大会は、2020年10月10日（土）～11日（日）の二日間にわたり、慶應義塾大学（大会準備会代表：高橋智会員）日吉キャンパス（神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1-1）において開催されます。観光シーズンとも重なりますので、宿泊・交通手段の確保は早めにご準備くださるようお願い致します。

(3) 2021年第73回大会について

2021年第73回大会は、愛知大学（大会準備会代表：白田真佐子会員）において開催されます。開催日程および開催キャンパスについては追ってご連絡致します。

(4) 大会開催時期の検討について

今回、台風の影響により学会の基盤事業の一つとも言える大会の開催を中止する事態となりました。理事会ではこのことに鑑み、開催時期の検討を大会委員会で行うことと致しました。台風は特定季節の自然災害ですが、地震や風水害は季節を選びません。今回の経験を将来に活かすには、理事会全体で「危機管理体制」を整え、万が一の時には会員への周知方、情報の速報性を図り、普

後策、すなわち研究発表の取扱い、研究発表者（司会者を含め）への対応など一定の基準を定める必要性があると認識しています。この点につき、ご意見があれば大会委員会にお寄せいただければ幸いです。

【出版委員会】

委員長 静永 健

7月28日（日）第1回出版委員会を開催し、学会報第71集の編集状況の確認、および学界展望（2018年1月～12月）の原稿の読み合わせを行いました。

10月の第2回は休会。メール回議によって、学界展望中国語翻訳版について、今後の作業のあり方等を協議しました。中国社会科学院文学研究所古代文学学科による当会学界展望の中国語翻訳は、今年、学会報第70集掲載分（2017年1月～12月）より開始されます。訳文は同院が発行する『古代文学前沿与評論』（第3輯、社会科学文献出版社、2019年12月刊行予定）に掲載されるほか、WeChat（微信）でも公開されます。スマートフォンで微信アプリ（<http://web.wechat.com>）をダウンロードして登録し、「古代文学前沿与評論」で検索をかけてフォローすれば、閲覧可能になります。なお微信はPC版もあります。

【選挙管理委員会】

委員長 松原 朗

10月11日に関西大学で開催された本年度第2回理事会において、来年度実施の評議員選挙は6月初頭から7月初頭にかけて、理事選挙は同じく7月初頭から8月初頭にかけて、監事選挙は10月の大会開催中の評議員会の時となると説明した。

【広報委員会】

委員長 大木 康

今年、ホームページのリニューアルを行いました。なおも見やすく使いやすいホームページになるよう改善を進めたいと思います。

今後も大会関係の情報ははじめ、外部団体・機関より

の奨学金、人事採用情報、各種研究会の情報についてもさらに充実をはかりたいと思います。また、中国語・英語のページについても一層の充実をはかりたいと考えています。

ご意見、ご要望をお寄せいただければ幸いです。

【将来計画特別委員会】 委員長 佐竹 保子

6月2日の第1回理事会に、評議員選挙規約についての検討報告書を提出した。会則の「選挙規約（1）評議員／通常会員により、無記名で10名以内を連記して投票し、上位60名を当選者とする。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の各地区の会員最少3名を含むこととし、上位60名の中に当該地区選出者が3名に満たない時には、当該地区会員の最高得票者から順に評議員に加える。また女性の評議員会参加を促進するため、女性会員最高得票者から第12位得票者まで12名を評議員に加える。」について、選挙管理委員会から「一部の地区で『最少3名』を確保するため、他より少ない得票で当選という事態が起こりつつある。各地区を『最少2名』とするか、二地区の合区を考えるべきではないか」との提起があったもの。本委員会の調査では、2008年～2018年の会員数は、どの地区でも15%～25%減少、関東地区で129名の減少、もともと会員数の少ない北海道地区・東北地区でダメージが特に大きいと分かった。本委員会の結論は現行の「選挙規約（1）」を支持。これを受けて理事会で、理事や評議員は各地区に戻ったら危機的状况を説明し評議員選挙等の学会の活動に積極的に参加するよう呼びかける、「選挙規約（1）」は当面現行のままとし、なお継続審議とする、と決まった。

また、10月11日の第2回理事会を受けて、評議員の繰り上げ当選に関わる選挙規約について、海上保安大学校公募の件について、委員会代理出席についての三件を検討し、10月15日と23日に報告書を提出した。これらをもとに理事会で、一件目は現行規約に遵う、二件目はホームページ上にリンクを張る、三件目は理事会の申し合わせ事項三点にまとめることに決まった。

事務局からのお知らせ

彙報

2019年度第1回理事会（6月2日開催）での決定事項について、6月10日付で持ち回り評議員を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・2019年度日本中国学会賞受賞者の決定について

【哲学・思想部門】

武田 祐樹 会員

「藤原惺窩と林羅山の交渉再考——『知新日録』受容を考慮に入れて」

【哲学・思想部門】

吉田 勉 会員

「廖平の今古学と『春秋穀梁伝』」

【文学・語学部門】

宮本 陽佳 会員

「澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって」

- ・新入会者の決定について

【審議事項】

- ・顧問の委嘱について

10月11日に開催した2019年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・理事長報告
- ・各種委員会報告
- ・『日本中国学会報』第71集及び会員名簿の発行について
- ・学会報編集担当校・大会開催校等について（2020年度）

学会報編集担当

門脇 廣文 会員（大東文化大学）、小塚 由博 会員（大東文化大学）

学界展望執筆担当

哲学／渡邊 義浩 会員（早稲田大学）
文学／齋藤 希史 会員（東京大学）
語学／日本中国語学会
学会便り編集担当（2019年第2号・2020年第1号）
静永 健 会員（九州大学）
大会開催校 慶應義塾大学（2020年10月10日～11日）

- ・会員動向について
- ・その他

【審議事項】

- ・2018年度決算・監査報告
- ・2019年度予算案
- ・新入会員の承認
- ・2019年度総会次第について
- ・その他

◎顧問の委嘱について

2019年度第1回理事会（6月2日開催）、持ち回り評議員会（6月10日付）の議を経て、次の二会員を顧問に委嘱することとなった。

池田 秀三 会員
川合 康三 会員

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年（2018・2019年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、あるいはファックスをご利用ください。

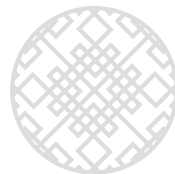
◎クレジットカードによる会費決済について

昨年度より、海外在住の会員を対象として、クレジッ

トカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927
加入者名：日本中国学会



「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2019年1月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2020）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、予めご承知おきください。

shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp（九州大学・静永あて）

「日本中国學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のよう
に定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記に

ついては、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りに通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想・文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてののみ認める。

抜刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

(昭和62年10月11日制定)	(平成13年5月13日修正)
(平成14年10月13日一部修正)	(平成15年10月5日一部修正)
(平成19年10月7日一部修正)	(平成20年5月17日一部修正)
(平成21年10月11日一部修正)	(平成22年6月6日一部修正)
(平成22年10月10日一部修正)	(平成23年10月9日一部修正)
(平成24年10月7日一部修正)	(平成25年3月31日一部修正)
(平成25年10月13日一部修正)	(平成27年10月10日一部修正)
(平成29年6月12日一部修正)	(平成30年6月3日一部修正)